

フランスに関するベルゼバブの意見

(グルジェフ『ベルゼバブが孫に語った物語』37章抜粋)

「最近の傾向として、ヨーロッパ諸国の住民たちや他の大陸の住民たちはみな、責任ある生き物[大人]に向けての成長段階の初期においてもうすでに、フランス人の性格について彼らが想像をめぐらせるうえで材料となるものを心身に結晶化させている。そして彼らはそうした材料に基づく確信として、フランス人は彼らの惑星でもっとも『ふしだら』で『不道徳』な国民だと思っている。

以前の私、つまりフランスに長く滞在する前の私の内側にも、フランス人についてそうした認識を生み出すような材料が蓄積されていた。おまえのお気に入りの惑星[地球]の表面のほとんどあらゆる土地に形成された無数の国々を訪れ、それぞれの土地の住民たちの間で暮らしながら、私はさまざまな会話のなかでフランス人に関するそのような意見が口にされるのを耳にしていたからである。

私はそれ以前にも何度かフランスを訪れていたが、そのときにはフランス人の精神的特徴に特別の注意を向けず、他のほとんどあらゆる国々の住民たちがフランス人に対して持っている意見についても特に深く考えたことがなかった。

だが、このとき私はフランスの田舎の町に暮らし、そして当然のことながら、私は現地の三脳の生き物[人間]たちのすることから『ふしだら』で『不道徳』という印象を受けるのではないかと暗に思っていたのだが、驚いたことに私はそんな印象は最初からまったく受けず、滞在期間が増すとともにこの驚きはさらに強まった。

しばらくして、私が現地の住民たちとつきあいだし、彼らの何人かと親しくなって彼らの家族とも交際するようになると、フランス人に関する『自動的意見』を私の内側で形成していた材料は消えていき、それに代わって私の内側には、フランス人に関するここまで現実に反する意見が他の国々の住民たちの心身に形成される原因となった各種の情報はいったいどこから来たのかを突き止めたいという衝動の『土台となる材料』が結晶化されていった。

この問題への関心は私のなかで日々に強まった。というのも、この国の住民たちの間で暮らすうちに、私は彼らが『ふしだら』で『不道徳』きわまりない国民などではなく、その反対にヨーロッパ大陸でもっとも『父性』と『節度』を重んじる国民であることがわかってきたからである」

[...中略...]

「さて、わが孫よ、おまえのお気に入りの惑星の他のさまざまな国の三脳の生き物たちの間にこの惑星のフランスという国の住民たちに関するこれほどまでに現実に反する認識が形成されているのはなぜなのかについて、おまえは以上の話から十分に理解できたと思う。

このフランスという国の一般の住民たちにとって、この惑星の他の国々の住民たちが彼らのいわゆる『文化の華』を咲かせるための場所としてこの国の首都を選んだというのは、大きな災難としか言いようがない。

そのほんの一区域だけとはいえ、彼らの首都が彼らの惑星の『現代文明の中心地』と見なされるようになってしまったことについて、私は心底、この国の一般の住民たちを気の毒に思う。

われわれはこのフランスという国の住民たちの健全さに驚嘆してもよいぐらいである。これは彼らが意識的に心がけていることではないかもしれないが、彼らの大多数は、彼らの国の首都が前述のようにこの呪われた惑星の『現代文明の中心地』と見なされるようになったせいで彼らの生活環境に生じた今ではきわめて異常としか言いようのない事態にも関わらず、《客観道徳》の心棒である二つの深い衝動、すなわち『父性尊重』もしくは『家族的なきずなの尊重』と『心の底からみずからを恥じる能力』を失っていないからである」